

帝都の街角

euphoria

賑わう帝都の片隅に、その店はあった。隠れ家のような佇まいに、雰囲気の良い内装、そして掲げられた看板には「当店では人間とそれ以外のお客様を区別致しません」と書かれている。私はこの店の主人であり、君たちは一風変わった常連客だ。

当店の名物メニューに、自家製のハーブティー、誰かが持ってきてくれた美酒も添えて。今日もひっそりと営業中。また、からんと鈴の音が店内に響く。いらっしゃいませ。

〔アспект生成質問〕

- **お品書き。**この店には名物メニューがあります。それは何ですか？ 他にはどんな物を提供していますか？
- **いらっしゃいませ。**ここには様々な人が来店します。帝都に住むのはどのような人々ですか？ 看板に書かれている“人間以外のお客様”とは誰ですか？
- [自由アспект]。好きに決めてください。

〔共同体への質問〕

- 店の主人は誰ですか？ 主人はどうしてこの看板を掲げるようになりましたか？
- “人間以外のお客様”は帝都においてどのように区別されていますか？
- 帝都に危険はありますか？ “人間以外のお客様”はその危険と関わっていますか？
- 常連客は見知った間柄かもしれません。君たちはいつこの店を訪れますか？ 店の営業時間は何時から何時までですか？
- 店の主人は営業時間外に何をしていますか？ この店には主人以外の店員は居ますか？

名前

リクオ、サミー、ススキ、ベル、リユー、ゴロウ、ギムリ、バーリン

〔時代の移行〕

〔時代〕2へ移るにあたって〔展開〕を（黒い左欄か、赤い右欄か）選ぶ。以降は、選んだ方の〔展開〕が続く。

〔時代〕2へと移る。〔アイソレーション〕の終わりを予感させる出来事。それはあらゆる会話の中に潜んでおり、無視などできない。

ある日、巷で有名な人物が店にやってきました。彼は名物メニューの味を褒めちぎり、君たちとひと時を共にするでしょう。「必ずまた来るよ」という嬉しい一言とは裏腹に、少しの不安が心に竊りました。

君たちはいつも通り名物メニューを注文しました。しかし、その味はいつもと少し異なっています。げげげと店の主人の咳が静かな店内にこだましました。

〔時代〕3へと移る。予期されていたことが起きてしまう。

〔アイソレーション〕の終わりは近い。この定めからは逃れられない。

彼のお陰で帝都中の人々が来店し、行列を作っています。そんな人々の中には、店の看板を良く思わない“人間”も居るでしょう。君たちの中でも“人間以外のお客様”は端の席に座り、肩身の狭い思いをするかもしれません。この店はもはや常連客だけの店ではありません。

いつも開かれていた店の扉には、休業中の札が掛かっていることが多くなります。その原因は単に店主の病気かもしれませんし、他に理由があるかもしれません。君たちは居場所が失われつつあることを、否が応でも認識することでしょう。

〔遣されゆくもの〕へと移る。最後の瞬間、またはその結果。

店の主人の理想は失われるか、別の形に変化していくことでしょうか。少なくとも、例の看板は誰の目にも留まっています。そこにはかつてあった一風変わった雰囲気はなく、どこにでもある、帝都の風が吹いています。君たちはまだこの店に通っていますか？ 名物メニューの味は変わっていませんか？

無骨な重機が無感情にかつての店を潰しています。瓦礫の下に例の看板が落ちていることに君たちは気付くでしょう。君たちがこの場所に集まることはこれが最後になるかもしれません。何か伝えることはありますか？

euphoria

本文

鮎方高明

編集

Stable Diffusion

イラスト

このバックドロップは、ロールプレイング・ゲーム『ダイアレクト』(Thorny Games)のアクセサリです。
『ダイアレクト』について興味がある方は、harrowhill.rdy.jpをご参照ください。

遊ぶにあたって、このバックドロップは自由にコピーしていただいて構いません。またクリエイティブ・コ
モンズ「表示-非営利-継承」ライセンス範囲内で自由にご利用いただけます。

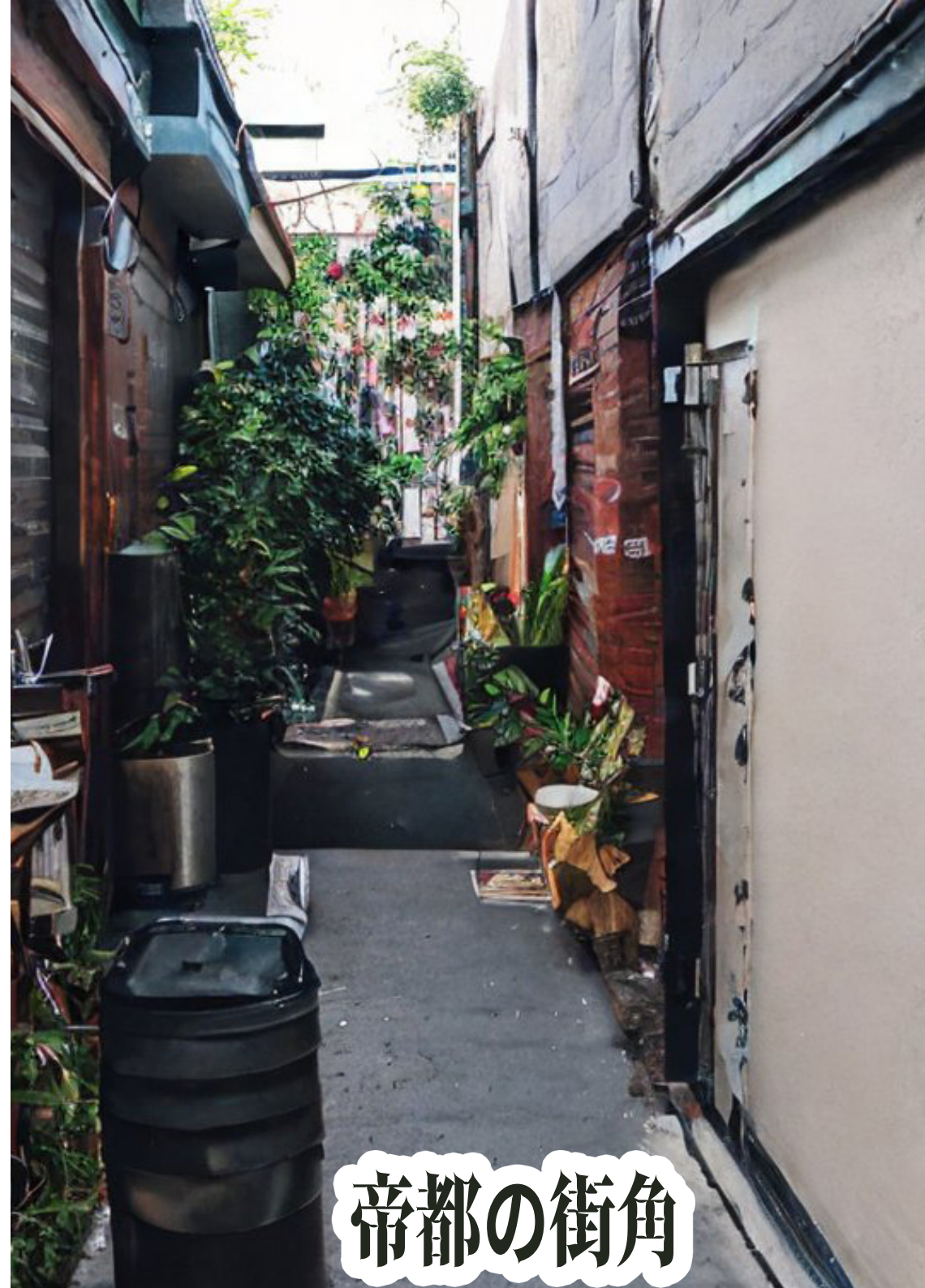
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/deed.ja>

This backdrop is copyright 2022 by euphoria, euphoria.rh@gmail.com.

Dialect is copyright 2017 by Thorny Games, LLC. All rights are reserved.

Japanese translation published by arrangement with Thorny Games

Publication. © 2020 by Harrow Hill.



帝都の街角